

【民事訴訟法】

次の**設問1**および**設問2**のいずれにも解答しなさい。解答用紙に、各自で「設問1」、「設問2」と記入して、解答すること。

設問1

「当事者尋問において、一方当事者が自己に不利益な事実を認める旨の陳述をしても、裁判上の自白は成立しない。」

上記の命題の当否につき、弁論主義、訴訟資料、証拠資料、証拠方法の語句に触れつつ、説明しなさい。

設問2

Xは、所有者であるYから甲土地を2000万円で買い受けたと主張して、Yに対し、売買契約に基づき甲土地の所有権移転登記手続を求める訴訟を提起した。これに対して、Yは売買契約締結の事実を認めたが、Xがいまだ甲土地の代金を支払っていないとして所有権移転登記を拒絶すると主張した。

裁判所が、Yの主張事実を真実と認めた場合、どのような判決を下すべきか。

【刑事訴訟法】

以下の【事例】を読み、【設問】に答えなさい。

【事例】

Aホテル3階の301号室に宿泊していた甲は、同ホテル1階のロビーで、覚醒剤取締法違反（所持）の現行犯として逮捕された。甲は、警察官に対し、「宿泊している部屋にある荷物を持って行きたい。」と申し出た。警察官は、甲を301号室へ連行した上、甲を同室の奥にあるベッド横の窓の前に立たせたまま、同室内を無令状で捜索し、同室出入口の真横に位置するトイレ個室から注射器1本を発見し、これを差し押さえた。

その後、甲は勾留された。逮捕・勾留中の甲に対する取調べは、黙秘権を告知した上で行われ、取調べを担当した警察官の口調は一貫して穏やかなものであった。甲は、勾留2日目に行われた取調べまでは、黙秘を続けたが、勾留3日目に行われた取調べの開始直後に、「取調べに、弁護人であるBを立ち会わせてほしい。」と要求した。しかし、警察官がこれに応じることはなく、諦めた甲は、再び黙秘した。そこで、警察官は、検察官からそのような話がなかったにも関わらず、「検察官は、あなたが初犯であることも考慮して、反省して全てを素直に話せば起訴猶予にすると知っている。」と甲を説得し、この直後、甲は自白した。

【設問】

- 1 Aホテル3階301号室の捜索・差押の適法性について論じなさい。なお、甲の逮捕は適法であることを前提とする。
- 2 甲の自白の証拠能力について論じなさい。なお、甲の勾留は適法であることを前提とする。